
幻想を体現する者

ぎゃりこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想を体现する者

【Nコード】

N7650R

【作者名】

ぎゃりこ

【あらすじ】

バカとテストとミミックの主人公^{やすらとへん}十種がバカテスの世界ではなくネギまの世界へいったらというお話。

ブログ〱誰にだって失敗はある〱（前書き）

バカとテストとミミツクの息抜きに書く感じで進めますので更新は不定期です。

ブローグゝ誰にだって失敗はあるゝ

皆さん、こんにちは。

僕の名前は、鑢^{やすり} 十種^{とくさ}本が大好きな大学生です。
家から出たら足元に穴があいていて落ちました。

落ちた場所は真っ白な空間。で、目の前にはやたらいい笑顔の子供。
うん、なるほど。これはあれか最近よくある二次創作の転生ものの
冒頭部分だね。

「うん、まあそんな感じ。あつても暇つぶしとかそんなんじゃない
からね？」

目の前の子ども（なんでも昔こころで祭られていた本の神様らしい）
が言うには今朝死んでしまった僕（病死）を助けるためにここに呼
んだらしい。何でも僕のような本を大事にしてくれる人のおかげで
今の自分があるとかないとか。今回のことは恩返しのようなものら
しい。物語の世界に連れて言ってくれるという事だったのでバカと
テストと召喚獣の世界へ、能力もくれると言ったので刀語
の虚刀流、忍法・骨肉細工、忍法・足輕を使えるようにしてもらっ
た。その代わり向こうの世界でも本を大事にしてくれとのことだっ
た。

薄れゆく意識のなかこんな言葉が聞こえたような気がした。

「あ、間違えちゃった（笑）」

とりあえず最初は能力の確認（前書き）

タイトル通り。

とりあえず最初は能力の確認

「ん、ここは？」

確か俺はバカテスの世界に送ってもらったはずだが…

周囲の確認。右、森。左、森。後ろ、森。前、森+紙。紙を拾って見る。それは手紙だった。

「さっきぶり。本の神（仮）だよ。」

実はバカテスの世界に送るはずだったんだけど間違えて違う世界に送っちゃった（笑）

ネギまつて知ってる？焼き鳥じゃないよ？まあ簡単にいえば魔法とかがある世界。表向きは普通の世界と変わらないけどね。

ちょっと危ない世界だから君の力を強化をしておいたよ。

まず一つは忍法・骨肉細工で姿を変える時、化物語と刀語のキャラになる場合は完全になりきれ。姿だけじゃなく能力もね。あと完成形変体刀も念じれば出るようにしてあるから。あつ、壊れてもしばらくすれば直るから安心しなよ。

もう一つはおまけかな。姿を変える時に服もイメージすればその服になる。いちいち着替えるのもめんどくさいしね。

じゃ後は頑張つてねえ。」

魔法ねえ。とりあえず…。

「なんや一般人かいな。悪いなあ、見られたからには殺さないかなのや」

鬼がいることはわかった。

side 刹那

「くっ！数が多いっ…」

まさか時間差で召喚してくるとは…油断していた…倒して背を向けた瞬間切られるとは…迂闊だった。脇腹の怪我がかなり深いこのままじゃ…。

「悪いな神鳴流の嬢ちゃん。悪いが手加減できんのや。恨まんといてな」

「くそつ。ここまでか」

ドゴンツ！

なんだ！？

横の森から出てきたのは上半身がなくなり消えていく鬼の下半身と赤いドレスを身に纏った美女。しかしなぜだろうとても美しいのに頭に響いてくる。

アレは危険だ！

「我が名は、キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブ

リード！鉄血にして熱血にして冷血の吸血鬼じゃ。すまんがうぬら… 儂のリハビリに少しばかり付き合ってもらうぞ！」

そこから起こったのは戦いじゃない。ただの虐殺だ。技も何もない彼女の動きそのものが暴力。彼女が走れば地面が抉れ、彼女が手を振れば暴風が起き、彼女が叫べば誰も動けない。

「は！」「はは！」「あはは！」「ははは！」「あははは… は？なんじゃもう終わりか？」

数十体はいた鬼の集団がものの数十秒で全て消えた。

「さて…」

彼女がこつちに来る。優雅な足取りで距離を縮めてくる。その足が撃ち抜かれた。龍宮か？

side out

狙撃か…。痛くないわけじゃないけど体が慣れているのかな。声を上げるほどでもない。撃ったのはあそこにいる子か。

「小娘！死にたくなかったら出て来い！儂は頭を撃ち抜いても死ぬぞ！」

しばらくすると肌の黒い背の高い女子が出てきた。まあ、銃を構えたままだが…

「それじゃあ、ちっこいほうの小娘。傷を見せろ」

なんで剣を構えるかな。銃持つてる子もさつきより睨んでくるし。

まあ吸血鬼だしね。

「二度は言わん」

睨みながらそう言つと小さいほうの女子がしぶしぶ傷を見せてきた。

かなり深いが大丈夫だろう。手刀を作り自分の脇腹を突き刺す。

「「なっ!？」」

驚いているがそんなのは気にせず、女子の傷に血をたらす。すると見る見るうちに傷がふさがっていく。傷があつた場所軽く撫で聞く。

「他にはないか？」

「はっはい!大丈夫です!」

「いったい何をしたんだ？」

背の高い女子がまだ銃を構えながら聞いてきた。

「吸血鬼の血には治癒能力があることを知らんのか?……ああ、安心するがよい、この程度では吸血鬼にはならんよ」

一応安心したのか銃を下して聞いてきた。

「一応、侵入者としてこの代表にあつてもらいたいんだが」

「ふむいいじやろう。案内せい」

「くくく、鬼の次はぬらりひょんか。いいじやろう相手になつてやろっ」

「いやワシ人間じゃから」

「たわけ、儂は五百年生きておるが、そんな頭をした人間、寡聞にして知らんぞ」

だつてねえ、なにあの後頭部?どんな人生送つたらそんな形になるの?つうかソファ―に座つてる幼女笑いすぎだし、ダンディなメガネのおっさんも口塞ぎながら笑つてるし後ろの女の子達も顔そらしてるし。笑つてないのは幼女の後ろにいるロボっぽい子だけだな。

「ま、まあ、ワシの頭の話は置いておくとして、ワシの名前は近衛近右衛門じゃ。此度はうちの生徒を助けてくれたことに感謝するぞ」

「かまわん。儂は儂に降りかかった火の粉を振り払つたにすぎん。

その小娘らが勝手に助かっただけじゃ」

「ふむ、ならお主がここに來た目的は？」

「觀光じゃ」

「……………はっ?」「……………」

皆啞然としてるな。まあ、間違っではないからいいだろう。

「本当はこことは違う場所に送ってもらはずじゃったんだが手違いでここに来てしまったのう。戻る手段もないから、しばらくこの世界を見て回ろうと思っただけじゃ」

「いくあてはあるのかの?」

「ないの」

「ならうちで働かんかの?」

「学園長っ!」

おお、ダンディなおっさんが学園長に詰めよってる。まあ、いきなり吸血鬼を雇うとか言えばそうなるよな。

「ふむ、いい提案じゃが……………何をたくらんでおる」

少し睨みを聞かせて聞いてみる。

「別に何もたくらんどらんよ。強いて言うなら監視のためにかの」
「そりやそうだろうな。とりあえず元の姿に戻るか…」

「なるほど。いいじやろう。正直に話した代わりに儂の本当の姿を見せてやろう。骨肉細工」

side 刹那

「なるほど。いいじやろう。正直に話した代わりに儂の本当の姿を見せてやろう。骨肉細工」

彼女がそう言うともものすごい速さで彼女の体に変化していく。長く美しかった金色の髪が短く黒く。かなりスタイルのよかった体が凹凸もなくなり、男の体に。絢爛豪華なドレスが黒く普通のどこにでもいそうな格好に。妖艶だった彼女の顔が温和な顔に変わった。

「名乗るのが遅れましたね。僕の名前は鑢十種やすりとくさです」

「……………」

「みんな黙ってどうしたんですか?」

目の前で美女が男に変わったたらだれでも驚くと思う。それより。

「あ、あの今のは?」

私が声をかけると優しそうな笑顔をこっちに向けて答えてくれた。

「今のが僕の力です。外見から体の中身まで変えることができる変装」というより変身の方が正しいですかね」

私が驚いているとエヴァンジェエリンさんが質問をした。

「待て！それは能力まで模倣できるのか！？」

そうだ。彼は吸血鬼の血と言って私の傷を癒した。なら彼は吸血鬼なのか？それとも能力まで模倣できるのか？

「ふつうは能力までは模倣できませんが、特定の人物は能力も含め完全になることができます」

「ならさっきの女もモデルとなった奴が存在するのか？」

「さあ、おそらくいないでしょう。ただの夢物語ですから」

夢物語？

「それはどういうことだ？」

「黙秘させていただきます。言葉で説明するのは難しいですし、簡単に手の内を明かすわけにはいきませんから」

「そこまでじゃエヴァンジェエリンそろそろ話を戻させてもらうぞ」
どうやら学園長たちも放心から抜け出したみたいだ。

side out

よかったあゝ。流石に神様からもらいましたって言っても頭を疑われるだけだしな。

「で、うちで働く件なんじゃが…」

「僕はかまいませんよ。もちろん他の人達が納得してくれるならですが」

学園長の隣にいるダンディなおっさんの方を見ながら言う。

「フォッフォッフォ。大丈夫じゃよ。しばらくの間監視させてもらうからの」

うわっ。普通に監視って言ったよ。このぬらりひょん。まあ、別にいいけど。

「まあ、構いませんが…」

「で、仕事の話なんじゃがの、君には副担任と女子寮の管理人と警備員と「待つてくたさい」何か問題でもあるかの？」

真顔で聞いてきたよ。

「教員免許どころか戸籍すらない僕を教員にするとところがまずおかしいです。素性の知らない男を女子寮の管理人にすることもおかしいです。そして何より監視が必要な人間にそこまで仕事をやらせるのがそもそもおかしいです」

「教員免許と戸籍はワシの権力で何とかなるじやろっし、君が女子生徒をどうにかしようとするものならそんな言葉を返してこないじやろっし、そして何よりこの方が監視がやりやすいからの」

隣のダンディなおっさんに「このぬらりひょん大丈夫なのか？」とアイコンタクトを試みる。

苦笑で返された。

「はあ、もういいです。ただ女子寮の管理人は生徒たちが辞めるよ言うてきたらすぐに辞めさせてもらいます」

「いいじやろっ手続きの方は明日には終わるじやろっから今日のところはタカミチ君のところに泊まってくれるかの」

ぬらりひょんがそう言うたダンディなおっさんが手を出してきた。

「タカミチ・Ｔ・高畑だ。よろしく」

「よろしく」

「じゃあ、置いてあるものは自由に使っていいから」

「そんなに簡単に信用していいのか？」

「少なくとも学園長よりはまともだってわかったからね」

「あの頭と比べたらほとんどの人物がまともです」

トイレに入って学園長の姿を骨肉細工で再現してみたら、なんかものつすごい違和感が後頭部に…。

うん、学園長を再現するのはもう二度としないことにしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7650r/>

幻想を体現する者

2011年10月7日13時44分発行